

## 4人の王子とセイマルの木

### 『ジャータカ物語』に基づく話

何百年も前に、ブラフマダッタという賢明で情け深い王様が、聖地ヴァーラーナシーを治めていました。この王様には4人の若い息子がいて、彼らは皆活気にあふれ、学ぶことに熱心で、冒険の準備ができていました。4人の少年は、ヴァーラーナシーとその周辺の丘や森を探索することが何よりも好きでした。

若い彼らの人生の中で、王子たちは、——彼らの父、母、そして知人たちすべてから——ヴァーラーナシーの南にある広大な森の中心に立つセイマルの木、または赤いパンヤの木についての物語をずっと聞いてきました。この崇高な木は巨大で、完全に左右対称で、そしてザクロ色をした花で満たされていると言われていました。

王子たちはそれぞれ、このとても美しい花が咲く木を、兄弟の中で誰よりも先に見たいと願いました。そこで、早春のある朝、一番上の王子は、太陽が上がる前に王様の御者を呼び出しました。「私を森に連れて行ってほしい」と、王子は言いました。「私は、古来のセイマルの木を自分の目で見たい」

それは、容易な旅ではありませんでした。何時間もの間、二輪馬車は森の中をどんどん深く進んで行きました。休憩のために馬が止まると、王子は徒歩で進みました。彼は木を見つけると決心していました。ついに、彼は森の中心に到着しま

した。そしてそこで、美しく湾曲した枝を持つ巨大なセイマルの木を見たのです。しかし、彼の目は大きく見開かれました。枝は裸だったのです！

王子は木の周りを数回歩き、そして何も付けていない黒褐色の枝を見上げました。花はどこにあったのだろうか。この木は特別なものには見えませんでした。それは枯れているように見えました！ 途方に暮れて、彼は宮殿に戻りました。

数週間後に、次の王子が、王様の御者にセイマルの木を見るために彼を森に連れて行くように頼みました。彼が森の中の最も深い部分に到着すると、彼の興奮は高まりました。彼は木が近くにあるとわかりました。先の方に開けた場所があり、ほんのかすかに赤いものを見分けることができました。空気はミツバチのブンブンという音や鳥のさえずりで満たされていました。彼は前に向かって走りまわりました。

彼がその場所に入ると、そこには目の前に木が高くそびえていました。何と立派な木でしょう！ 優に40メートル以上の高さで、日の光で赤いルビーのように輝いた花に満ちあふれていました。あらゆる種類の鳥たちが、これらの花の蜜を大いに楽しんでいました。歓喜した王子は木の下に寝そべり、その輝きを見詰めました。自分がセイマルの木を見つけたと知ったら、兄弟たちは何と云うだろうか。彼は、彼らの反応——彼らの驚き、畏敬——を想像しました。それから、彼はためらいました。「皆に伝えるのはもう少し待とう」と考えました。彼は少しの間だけでも、一人でこの光景を味わいたいと思いました。

さらに2週間後、3番目の王子が伝説のセイマルの木を求めて、森に行きました。驚いたことに、彼は普通の木を見つけました。それは美しい姿で、明るい緑色の

葉を豊富に付けていましたが、花は一つも見えませんでした。彼は御者を見ました。「これが正しい木であるのは確かなのか」。御者はうなずきました。王子は再び目を細めて木を見上げ、「ふん」と言いました。それはまったく特別なものではありませんでした。王子はしばらくその涼しい木陰に座り、それからがっかりして宮殿に戻りました。

最後に、一番下の王子が、森に入ることを決心しました。彼が森の中心に到着した時、彼は巨大なセイマルの木が、花ではなく、何百もの種のさやで覆われているのを見ました！ 薄緑色の指のように枝からぶら下がっているものもあれば、すでに茶色になり、はぜてふわふわとした白い綿の小さい房を見せているものもありました。「うわあ」と、王子はそつと言いました。ちょうどその時、そよ風が吹き、綿のうちの幾つかが風に吹かれて飛びました。若い王子は、それらをつかもうと笑いながら木の周りで羽毛のように軽い種を追い掛けました。彼はつかめるだけつかんだ綿を両手に抱えて、宮殿に持ち帰りました。

兄弟たちを見ると、一番下の王子は大きな声で彼らに呼び掛けました。「ちょっと聞いてください！」と、彼は言いました。「今、セイマルの木を見てきたのです。そして、私がおの木に見つけたものを見てください！」。彼は綿がはじけた種のさやを一握り差し出しました。

「それはセイマルの木のものであるはずがない」と、彼の一番上の兄は言いました。「私は数カ月前にあの木を見たが、その時には乾いた枝以外は何もなかった」

「私がそれを見た時」と、2番目の王子は言いました。「それは花——鮮やかな赤い花——で完全に覆われていた！ 無数の花だった！ 私は、皆に話すのを待っていたんだ」

「あなた方は夢を見ていたに違いない」と、3番目の兄が言いました。「セイマルの木には葉が茂っていた。他のすべての木と同じように、葉以外の何もなかった」

兄弟たちは当惑して、互いに顔を見合わせました。それぞれは自分自身の体験に確信を持っていました。しかし、自分の兄弟たちが偽りを話さないことも知っていました。最後に、2番目の王子は言いました。「私たちは異なる木を見たに違いない」

彼らの父である王様は、戸口からこのやりとりのすべてを目撃していました。彼は歩み入り、ほほ笑み、そして言いました。「おまえたちは、それぞれセイマルの木を見た。おまえたちはただ、異なる時にそれを見たのだ」

「私にはわかりません、親愛なる父上」と、一番上の王子は言いました。「私たちにもっと教えてください」

「セイマルの木は、春に自ら生まれ変わる。春のごく初めには、それは裸の枝を持っている。それから、花を咲かせる。その後、それは葉で覆われる。そして、最後に、それは綿を放出する。しかし、本質的に、木は同じものなのだ」

王様は彼の息子たちを、愛を込めて見ました。ゆっくりと、王子たちは新しい理解で顔を輝かせ、うなずきました。「来なさい」と、王様は、最も若い息子の髪をくしゃくしゃにしながらいいました。「さあ、皆で一緒にセイマルの木を見に行こう」

『ジャータカ物語』は、紀元前 300 年から西暦 400 年の間の、500 を超える寓話(ぐうわ)と逸話を集めたものです。ブッダ神の多くの前世について物語っています。これらの物語は、人間や動物として生まれ変わったボーディサットヴァの美德をたたえています。

Retelling by Rashmi Smith

Illustration by Mwenda Kudumu

Design Layout by Hira Tanner

© 2017 SYDA Foundation®. 著作権所有。